

3-4 プレゼンの達人を目指して

中村純一（佐賀市立大和中学校）、藤原直樹（横浜市立西富岡小学校）

1 ワークショップのねらい

児童生徒のプレゼンテーションスキルを向上するための練習を、指導者が実際に体験することを通して、指導方法のコツやスキルを身につけることを目指す。

2 ワークショップの流れ（13:50～15:20）

時間	内容
13:50	1. ワークショップ概要説明 ①講師紹介 ②WSのねらい ③WSの流れの説明
13:55	2. アプリ操作演習 ①iBooks、iTunes U、Keynoteの操作演習 ◇アプリの概要説明 ◇基本操作 ・iBooksを用いたマルチタッチブックの簡単な操作方法 ・iTunes Uの構成、操作方法の概要説明 ・Keynoteのスライド変更や他の簡単な操作方法
14:05	3. 児童生徒に対するプレゼンテーション指導内容についての演習 ①「競え、着眼点！見立てゲーム」（アイスブレイク） ・進め方とファシリテーション方法
14:10	②「無茶ぶりプレゼンテーションパート1 ～3分と2分の間で～」 ・進め方の紹介 ・実践
14:20	③「改善宝箱」 ・iBooks、iTunes Uを活用したプレゼンテーションの改善
14:50	④「無茶ぶりプレゼンテーションパート2 ～3分と2分の間で～」 ・改善したことを生かした2回目の実践
15:05	4. 今後の指導にあたって ①体験して感じたことの共有 ②児童生徒への指導やファシリテーションのコツや心掛け ③あると便利な道具の紹介

ここ数年で、TEDなどを始めとする優れたプレゼンテーションが様々なメディアを通して、簡単に視聴可能になった。学校現場からテレビ番組などの様々な場面においても、この言葉が用いられており、人前で話をする、特にそのスライドデザインや展開、話法など、プレゼンテーションにまつわるスキルについての研修やワークショップが開かれている。学校現場においても、段階を踏まえでプレゼンテーションスキルを学ぶという学校もあるほどである。プレゼンテーションスキルは教師も生徒も高めていきたいところである。

では、このワークショップのタイトルにある「プレゼンの達人」が表すものはいったい何か。よく言われることがらを箇条書きで書き出すと次のようになる。

- ・何を伝えているのかがとてもよく分かる。
- ・スライドデザインが素晴らしく、話とのバランスがとれている。
- ・話し方がうまく、ジェスチャーを用いながら、聞き取りやすい高さ、テンポで話している。
- ・聴衆の心をつかむことができ、何らかの点で内発的動機付けをもたらしている。

といったことがうまくできれば、プレゼンテーションの達人と言ってもいいのかもしれないが、今回は、児童生徒をプレゼンの達人にするための研修であり、主体は児童生徒であることを考えると、大人とは異なるアプローチが必要である。

そこで、このワークショップでは、日頃接している児童生徒をプレゼンの達人にするため、または、彼らが自ずとプレゼンテーションのスキルを上げたいと思うような指導方法を考えるための一端になることを目指して、児童生徒に対して行う指導方法を参加者と一緒に体験しながら進めていくことにする



なお、ワークショップにおいては、iPadを使用し、このワークショップ用に作成したiBooks用マルチタッチブック、iTunes Uコースを用いて、各種資料や教材を提供する。また、発表に伴うスライドについては、Keynoteを使用する。

演習では、アイスブレイクとしても使える練習を行う。これは、お笑いで言うところの「物ボケ」、演劇教育で言うところの「見立て」に当たるものである。人前で話すことへの抵抗をなくすこと、そして、他のものへの寛容的な承認を積極的に行う雰囲気をつくることなどを目指す。次にこちらが決めたテーマに基づき、3分で話を構成、話す練習をし、2分でプレゼンテーションを行うという練習（無茶振りプレゼンテーション）である。あえて準備時間を短くしているのは、原稿を書く時間をなくすためである。事前に書かれた原稿を一言一句間違えることなく読もうとする生徒が多いこと、そのことが影響して文章が棒読みになってしまうことを避けるためである。練習の際は、話をする内容ごとにラベルと呼ばれる見出しを考え、そのラベルを思い出して話をすることを伝えている。話す内容が同じなら、言い回しや語尾などが変わってもよいということを伝えている。発表するときには、後に自らの様子を観察するため、各グループでiPadを用いて動画を撮影しておき、その改善点について、各グループでお互いに協議しながらよりよいプレゼンテーションにするための練習に取り組む。その際、様々な改善点のヒントがiBooksにより、改善宝箱という名称で提供される。その後、無茶振りプレゼンテーションを実施するという流れになる。児童生徒のプレゼンテーションを教師はどうファシリテートしていくのかを体験しながら、指導のコツをつかむことができるようなワークショップを目指す。